

学んだことを根拠に自らの考えを構築できる授業づくり

—1年目の反省を踏まえた実践—

1. テーマ設定の理由

授業中、本校生徒に自分の意見を聞くと、考えや主張は持っているものの、その理由を明確に説明できない生徒が多く目についた。「なんとなくそう思う」という回答が多く、学習後きちんとその考えに裏づけをしたり、根拠によって主張を変容させたりするような授業づくりが必要であると考えるようになった。選挙権が18歳に引き下げられ、生徒たちはより一層政治に参加していくことが求められる。また大学入試制度も変わり、必要な資料を適切に読み取る能力も必要とされる。必要な情報を取捨選択して自分の考えを明確化し、その過程を自分で説明できるようなそんな生徒を育てていきたいと思い、本実践のテーマとした。

本年度の実践は、昨年度の実践からの継続研究なので、昨年度の反省を踏まえたものとする。本稿ではまず昨年度の実践を振り返り、反省を踏まえた点や他角度からの視点を再構築していきたい。

2. 実践内容

(1) 昨年度の実践について

a. 単元：1年・現代社会 地方自治「地域の課題を見つけよう」

b. 実践のねらい：

地方公共団体のしくみを学び、昨今の財政状況が厳しい地域の現状を取り上げる。人口流出や環境問題、高齢者の増加など、地方にはそれぞれ課題があり、それをどのように解決しているかを学ぶ。各地方でのさまざまな取り組みを学んだ後、自分の住んでいる地域の課題を考える。実践のねらいとしては、対象自治体の資料を複合的に分析させ、実現可能な解決策を考えさせる。さまざまな政策には利害関係が存在し、住民や事業者など多くの人を納得させなければいけない。例えば「人口増加のために、魅力あるテーマパークを作る」といった単純な解決策ではなく、財政の面、環境の面、経済の面など複合的な観点から考えを深めていきたい。

授業手順としては、①「将来地元に住みたいか。住みたくないならそれはなぜか。」「住みたい町にするにはどうすればいいか」を事前アンケートに書く。②授業の中で地方自治に関する語句や現状を学び、地方創生に関わるさまざまな事例を学ぶ。③地元を向け、それぞれの地域のテーマ（(A)人口、(B)財政・経済 (C)環境・交通 (D)医療・都市計画 (E)観光、(F)産業・消費）ごとにグループを作り、客観的なデータ資料から読み取れることを分析し地域の課題を議論する。その際、ルーブリックを用いて、授業で学んだ語句や事例などを意識的に用いて議論することに留意する。④そしてグループをジグソー班で組み直し、それぞれのテーマ資料を持ち寄り、総合的な観点から実現可能な具体策を話し合う。

c. 授業の実際：

手順①では、地元・A市の少子高齢化の現状や公共施設の老朽化の問題、魅力の有無などが問題意識として出てきた。将来的に都会で就職するため地元を離れたいと希望する生徒が多かったのが印象的だった。手順②において、財政破綻したのちに再建に成功した地方都市の事例や、さまざまな地方活性化の取り組みを映像や資料を用いて具体的に紹介した。A市の状況に照らして考えている生徒もいる様子だった。手順③において、A市のさまざまな取り組み、財政状況、A市民の消費動向や事業

所数の推移、福井県内の経済状況などの資料を複数準備した。資料に関しては、A市や福井県のホームページの統計資料や内閣官房ビッグデータシステムのRESASを活用した。生徒はA市や福井県の現状を読み取りながら、グループ内で議論し、A市の特徴や課題を見出していった。

手順④において、ジグソー班で組み直されたグループで、内容の違うテーマ資料の概要を発表し、それぞれの課題を整理することで様々な情報を共有した。そして、現状を踏まえた上でそれぞれの課題から取り組まなければいけないか考えた。例えば、あるグループでは、人口増加のために「医療サービスの充実・発達」を第一の解決課題として取り上げた。すでに少子高齢社会が進んでいるA市では医療サービスの充実や発展を図り、生涯をすごせる場であるという魅力で住民を増やし、そこから少子高齢化の改善・税収が増加し財政が安定する。そして増えた分のお金は観光産業に費やし、人口を増加させ続け、経済は安定すると考えた。その一方で別のグループでは、県税を増やすため、「企業を誘致し、事業所・事務所を増やすこと」を第一の解決課題として取り上げた。A市にある空き地や空き家を整備し、工場を作ることで雇用を拡大させ、そこで働く人たちの家族を住ませ人口の増加を図ることを考えた。また、「大規模な雪祭りなどのイベントを定期的で開催する」ことで人々を安定的に呼び込み、レストランや宿泊施設を誘致するというアイデアや、あえて「えちぜん鉄道の停車駅を減らしたり採算の取れない公共事業をなくしたりする」ことで予算を浮かし、余った部分を特産物のPRに上手く使うというアイデアもあった。グループごとに解決策は異なるものの、生徒は様々な角度から整理した資料を根拠に、地域の課題に対する解決策を考えることができた。

(2) 昨年度の実践の反省を踏まえた本年度の実践への改善策

実践を通じて生徒たちがグループで取り組んだ課題は下記のA～Cである。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">A. 地域の資料を読み取り、整理する。B. 地域の資料内容を説明し、情報を共有する。C. 地域の課題について、地域の現状をふまえながら多面的な角度から議論する。 |
|--|

Aに関しては、かなりの分量の図表や文章の資料ではあったが、グループ内で協力して読み取ることができていた。しかし、主体的・対話的で深い学びの視点から実践を見直すと、観点別の他自治体との比較資料がなかったため、他の自治体と比べたときのA市の状況を正しく把握することができなかった。

Bに関しては、資料を説明するのに時間がかかり、全体で共有する時間を延長した。そのため、本年度の実践では資料を整理するトレーニングを日頃の授業より行い、グループ学習などで発表する場を定期的に設ける必要があるだろう。時間は限られているので、資料の要点のみを発表して情報をスムーズに共有できるようにしたい。

Cに関しては、どのグループも多面的な角度から議論を行っていた。しかし、地域の現状に関して十分な角度から議論できたかは検討の余地が残る。議論の声に耳を傾けると「商業施設を作れば若者は集まる」「楽しくないのは若者に魅力のある場所がないからだ」といった、若者向けの政策の必要性を訴えた意見が出ていた。しかし、高齢者の割合が多いK市では、若者以外の幅広い意見も考慮しなければならない。そこで、各年代の地域住民の意見がかかれた資料を用いて、幅広い層の地域住民の意見をもとに課題の解決に向けた解決策を考えさせたい。

また、議論の前に生徒に提示したルーブリックを意識し取り組んでいる生徒も多かったが、議論が白熱し意識的に活用できていない生徒も見受けられた。そこで生徒自身でルーブリックを作成し、議論での発言の中においても自己評価につなげる方法も検討していきたい。教員は観点のみを示し、到

達レベルの内容を生徒に考えさせたい。

本年度の実践への改善策としては以下の4点が挙げられる。

- ・さまざまな比較資料を用いて自治体の状況を正しく把握する。
- ・市民の声を幅広く取り入れた資料を準備し、さまざまな年齢層に考慮した政策を考える。
- ・日頃の授業より、資料を読み取らせたり発表をさせたり、といったグループ活動を充実させる。
- ・生徒自身でルーブリック内容を検討し、自己評価につなげる。

資料の厳選を行い、自治体の特徴を生徒たちが正しく把握し、主体的・対話的で深い学びができるよう検討したい。

(3) 本年度の実践

- a. 単元：1年・現代社会 地方自治「K市の現状を探り、これからのA市の方向性を考えよう」
b. 実践のねらいと昨年度との違い：

昨年度同様、各地方でのさまざまな取り組みを学んだ後、自分の住んでいる地域の課題を考える。実践のねらいとしては、対象自治体の資料を複合的に分析させ、実現可能な解決策を考えさせる。

複数の資料を提示し複合的な観点から考えを深めさせる点は昨年度と同じであるが、本年度は、テーマを自治体の財政状況と人口問題に絞り、資料読み取りの質を深めた。また、自治体を実施した市民アンケートの結果を資料として用いることで、幅広い層の市民の声を市政に反映させることを念頭に置いてこれからの政策の方向性を考えさせた。

昨年度			本年度	
(A)	人口	→	(A)	財政状況
(B)	財政・経済		(B)	人口問題
(C)	環境・交通		(C)	市民アンケート
(D)	医療・都市計画			
(E)	観光			
(F)	産業・消費			

(A) 財政状況では、過去3年分の財政収支、他自治体である福井市の財政収支、A市の総合基本計画、RESASで算出した①一人当たりの地方税(A市、B市、C町)、②A市の目的別歳出決算額の比較(A市・全国平均・類似団体平均)の資料を用意した。

(B) 人口問題では、人口ピラミッドの比較(2015年と2040年)、人口推移グラフ、出生数・死亡数/転入数・転出数の推移、A市地方創生総合戦略の人口ビジョンの分析資料を用意した。

(C) 市民アンケートの資料では、平成27年度A市「地方創生に関するアンケート調査」の資料を用意した。A市内に居住する18歳以上の全市民・市内の全中高校生・A市出身者・A市関係者が対象となっている。

尚、昨年度用いたルーブリック評価については、予定時間が確保できず、また、評価基準についても昨年度の反省を活かした十分な検討ができなかったため今回は用いなかった。

授業手順としては、下記のように行うこととする。

- 手順①：授業の中で地方自治に関する語句や現状を学び、地方創生に関わるさまざまな事例を学ぶ。
手順②：A市のイメージとして「A市の特徴・現状」「今後、A市が活性化するためにどうしたらよ

いか」をワークシートに書く。

手順③：資料のテーマ（A）財政状況、（B）人口問題（C）市民アンケート ごとにグループを作り、客観的なデータから読み取れることを分析し地域の課題を議論する。

手順④：（A）～（C）のグループをジグソー班で組み直し、それぞれのテーマ資料を持ち寄り、総合的な観点から実現可能な具体策を話し合う。そして、具体策について理由を踏まえてランキング付けし、グループごとに発表する。

手順⑤：A市の今後の展望と題し、「A市の特徴・現状」と「活性化プラン」をワークシートにまとめる。

c. 授業の実際：

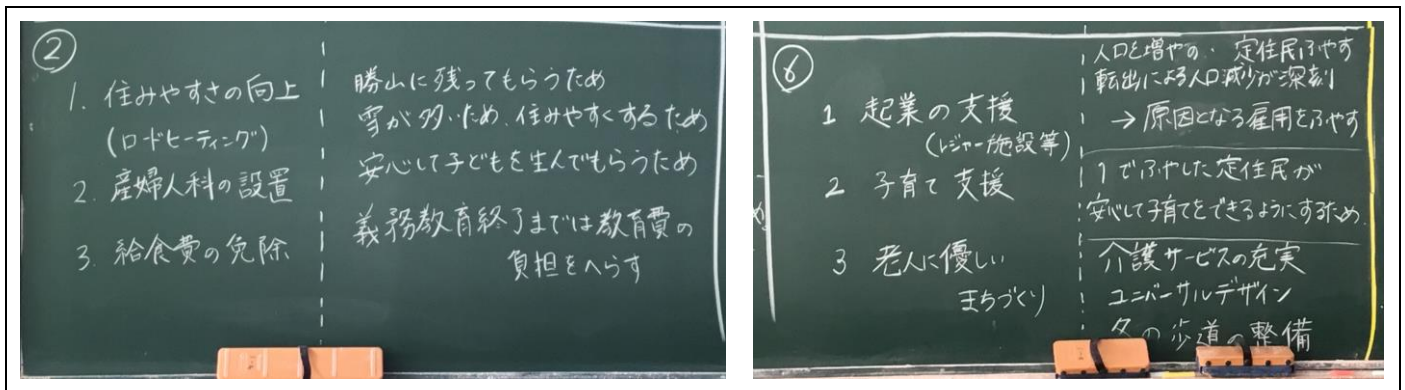
手順①については、同じ福井県の鯖江市「JK課」の取り組みや、A市と自治体規模が同程度の北海道砂川市の「スイートロード」事業を取り上げた。さらに、「ゆるきゃらグランプリ」や「B級グルメコンテスト」など、各地で行われているイベントも紹介し、地域活性化策が全国規模で行われていることを確認した。

手順②については、生徒自身が持っているA市のイメージを書かせた。「山しかない」「恐竜博物館に頼りすぎ」「バスの本数が少なくて住みにくい」「少子高齢化が進んでいる」といったネガティブな意見がみられた。また、活性化のアイデアについては、「経済を発展する」「住みよい町にする」といった漠然とした回答が多かったり、何も書けなかった生徒もいたのが特徴的だった。（下図）

生徒が記入したワークシート掲載

手順③について、普段の授業でもペア学習やグループ活動を通して、資料の読み込みや共有、発表などをしてきたため、生徒たちはすぐに取り掛かることはできた。ある資料を読んだ生徒からは、グラフの変化に気づき「なぜそうなるのか」という疑問の声も上がっていた。しかし、今回は資料の分量が多かったため、資料の読み取りに予定以上の時間がかかった。また、個人で読み込んだあとグループで共有し、議論をさせたかったが、私自身の指示が「個人で活動する時間なのか」「グループで活動する時間なのか」が明確でなかったため、活発にグループで共有するところまでいかなかった。

手順④について、ジグソー班で組み直されたグループで、それぞれのテーマ資料の概要を発表し、それぞれの課題を整理することで様々な情報を共有した。そして、現状を踏まえた上でそれぞれの課題から取り組まなければいけないか考えた。例えば、あるグループでは、A市民がずっとA市に住み続けるため、住民の「住みやすさの向上」を解決策とした。A市は豪雪地域なので、市の政策である「ロードヒーティング」事業にお金をかけ、雪の不便さを解消することを第一に考えた。そして、「子どもの出産の際、専門の産婦人科が市民病院にないために福井市内まで出て出産をする」現状がA市から人口流出の原因につながるととらえ、「産婦人科の設置」を第二の解決策に掲げた。さらに、「給食費の免除」を通して教育費の負担を減らす取り組みを第三に挙げた。（下左図）



また、あるグループでは、雇用を増やし、定住民を増加させるための取り組みとして、起業の支援を第一に挙げた。A市には広大な土地や空き家が多い。そこで起業を市が全面的に支援することで人口増加につながるのではないかと考えた。そして住民が安心して子育てできるようにするため、「子育て支援」を第二に挙げた。最後は、「老人に優しいまちづくり」として介護サービスの充実や冬の歩道の整備など、高齢者が多いA市の住みやすさを第三に考えた。（上右図）どのグループも市の人口問題や財政状況に配慮しながらも市民の声を取り入れた解決策を深く追究することができたと思う。

手順⑤では、資料の読み取りやグループでの話し合いを踏まえた上で、個人に戻し、今後の「A市の現状」や「活性化プラン」をワークシートにまとめさせた。「特徴・現状」については、「A市が地域活性化のために意外と力を入れていることが印象に残っている」「市民アンケートから、子どもにA市に定住してほしいと願う大人は少ないという結果が印象に残っている」と書いた生徒がいた。調べてみてはじめてA市の現状に追究できたのではないかと考える。また「活性化プラン」では、自分たちのグループの意見に他のグループの意見を取り入れている生徒もいた。グループ活動や発表を通して生徒同士の学び合いが効果的に現われていると感じた。

生徒が記入したワークシート掲載

また、ある生徒は、最初に書かせた「A市のイメージ」において、「あまりショッピングが出来ない」「恐竜に力を入れている」「空き家が多い」といった表面的な現状のイメージしか挙げられなかった。「ショッピングモールの建設」といった活性化のためアイデアも乏しかった。しかし、活動を終えて「A市の今後の展望」を書かせてみると、「転出による人口減少が深刻である」「晩婚化・非婚化が深刻である」という特徴・現状や、活性化するためには「雇用を増やし、定住民を増やし、子どもを生みたくするような支援を充実させて、お年寄りも安心して生活できるよう、市全体で支援する」ことが必要であると書いていた。（下図）

学習を通して、明らかに深い学びが達成できていることが分かる。また解決策についても、ただ「ショッピングモールの建設」をするといった表面的な解決策に留まらず、複数の資料を根拠にして複合的な視点から自分の意見が構築されたと言えるだろう。

3. まとめ

本実践の反省としては、以下の3点が挙げられる。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 資料の厳選 2. 指示の明確化 3. 主体的で深い学びを実現するための改善 |
|--|

反省すべき点としての一つ目は、資料の分量が多く、十分に時間をかけて読み込ませることができなかった点である。昨年度に比べ、生徒たちもトレーニングを積み、資料内容も厳選したがまだまだ資料を読み込む時間が足りなかった。資料を十分に読み取り理解するためには、教員側で掴ませたい内容を焦点化した上でさらに資料を厳選していく必要があるだろう。

二つ目として、今回資料内容が十分に読み込めなかった原因として、教員の指示が曖昧だった点が挙げられる。手順3で資料を読むときに、個人で資料を読む時間なのかグループで共有する時間なのか指示が不明確だったため、グループ内において十分に資料情報が共有できなかった。資料を読む時間の軽減のため、資料をさらに分割して読ませるといった解決策もある。次年度に向けてさらなる検討を行いたい。

三つ目として、主体的で深い学びを実現するための改善として、資料収集自体を生徒たちに考えさせることを検討したい。生徒は教師側の提示した資料を読み込むだけであった。自治体の問題を考える時どんな資料が必要か、また、どこでその資料を入手できるかということまでを生徒たちに考えさせても良かった。それぞれのテーマの枠のみを提示し、生徒の興味・関心をもつ資料を自ら準備することでより主体性は強まり深い学びへとつながると考える。ただし、生徒の集める資料のレベルが低かったり、ありきたりなものになったりしないよう留意すべきである。例えば、資料の収集方法に関して指導し、インターネットでの収集のみならず、図書館や市役所に出向いたり、住民への聞き取りを行ったりといった幅広い角度から資料を集められるようにする必要がある。さらに今回は実践に取り入れることができなかったルーブリックを用いた評価についても再度検討し、生徒の学びの評価につなげていきたい。

本実践の目標であった、「学習後きちんと自身の考えに裏づけをしたり、根拠によって主張を変容させたりするような授業」作りとその効果についてはおおむね達成できたと考えている。今後は、本実践での反省を踏まえた授業作りを検討していく。さらに、近年では総合的な学習の時間においても探究活動が取り入れられている。総合的な学習の時間で地域に根ざした探究活動をする場合、社会科授業との住み分け、特にどこまで社会科の領域で担うべきかということをあわせて次年度の研究テーマにしていきたい。